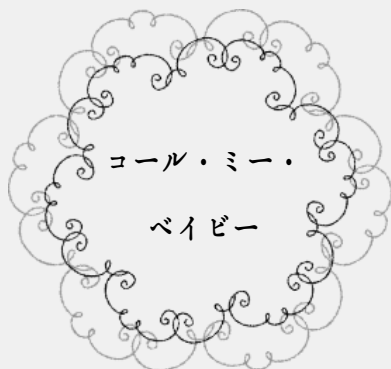
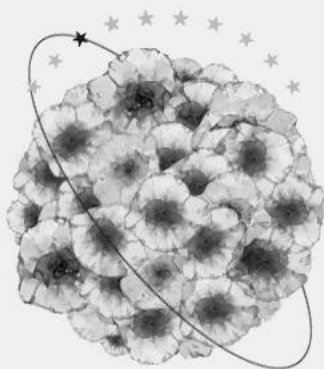




— ** *

大事で可愛くて憎たらしいけど、わがままを言うのは信頼の証だって、そう言うの、俺はきちんと分かってる。だから、理不尽なわがままは可愛いだだけだったし、とにかくお前が唇を朱らせて下塗りに命令を飛ばして来ることはほんとにうれしかった。あの、だから、報復だとか、そんな事考えたことないってば。ほんとに。ちらりとも過ぎらせたこともない。

俺達はちよつと、行き過ぎるってとこ、あるじゃないか。キム・ジョンデは違う。あいつは、いつでも好い加減と言うものを知ってる。そう言うところ、大人だなあって思うけど、がまん慣れてんのかなっていうのも、思わないでもないよ。…それを言うなら俺もそうだって？

うーん。まあ、たぶん、そつだ。お座り。伏せ。待て。俺が得意なのはそう言う事だよ。犬に当て嵌めて考えてみれば、だよ。まさか本当にそんなことしない。

姉さんが飼いはじめたマルチーズはそのどれをも覚えさせられず、わがまま放題だ。俺には厳しい躾けをしたって言うのに、姉さん、それは甘やかし過ぎって言うもんじゃないの。え？ 『可愛いだだけいるのが仕事だって？』ばか言つなよ。こいつつきから俺の膝がしらやら爪先やらに歯を立ててるよ。お髻婆にも程があるだろ。それが可愛いって？ …その気持ちは分からないけど。

あー。もう、脳みそ煮ええぎってばかな考えしか思い浮かんで来ないや。でも、忍耐が過ぎる位に忍耐をしたから、だからなのか…俺俺、本当は本当に我慢強いんだよ。知ってるよね？ お前が一番よく知ってるよね？ だからさあ、あの…これは、その…我慢が弾けた証拠だって、言うんだろーか。ああ、言い訳にもならない…。

「い。うく。うん。はー」

「ン。ン。あ…ふかい？ だい、じょうろ」

「んっ。あ。あでて、きた。また・でたあ。より。…ちゃんより。」

「あ…あ、べっちゃん？ まえ、すごい、ね。だらだら…」

「あ。まだ・だめ。うごいて、だめ。」

「…、はい。」

ビョン・ベッキョンはちいさく呻いて、それから頬をシートに押しつけた。それで、とても深いため息を吐いて、うつそりと瞳を細める。…はああ。

あ、すぐ、くるしそう。かわいそう(それで、死ぬ程かわいい。)(で、すぐやらしい。)(。俺はちよつと悲しくなつて、(めんを言う代わりに彼のピンクに染まつたうなじにキスをした。髪の毛の生え際。そこに舌を這わせて、苦しそうなときは、ピストンをするのではなくて、生殖器や乳首を弄つてやる。というコメントを思い出して、そうしてみた。背面から伸びて来た俺の指が、ベッキョニのぷくりと突つた——胸のさきを、摘みあげる。指のほらでこりこりと揉みしだいたらまたかわいく喘いだ。ああん。

…おんなのこみたい(あ。そんないいかた、よさないな。このこは、男の子だもん。そう思ったから、生殖器もややわと扱いてあげた。かわいい。さっき指で触れたゼンリツセン——って言うのは、ほんとつに、ネットで知った通りにつるりとした感触をしていた。巧く探り当てられるかとても心配だったけれどおっかなびっくりしながら、時間をかけてそうしたけれどきちんと見つけられてほつとした。指のほらで押し当てやるといいと書いてあったのも思い出したから、つよくしないように慎重に気を配る。

俺がまゝとしていたら、ベッキョニは上平身をベッドの上へべたりとくつつけて、（：大胆にも！）腰を高く突き上げるかこうを、した。俺はそれで目の前がチカチカして、それにも泣きたくなった。ええ、こぼつびなの。それ。俺が、とても我慢をする良い子だったから！

だけどベッドはレイ兄さんのものだから、汚したらかなしむだろうなあ、と思った。かなしむ、と言つか、何と言えはいいか分らない顔をして、眉を垂れさせて、「気にしない。けど、きにする。」と言つかなあ。

そう言う話を、ふたりでして、「それじゃあもう言わないようにしないと」と、ベッキョニはからだの下半分は床に下ろした。そんなことをして、膝が床に擦れたらかわいそうだと俺は言つたけれどベッキョニは「いたくなつたらちやによるがなめて」と言つた。何だ、そのわがまま。するけど。幾つでも。

ねえ・それよりも、ばれないようにしなくちゃいけないんだ。人の部屋で、目を機会を盗んでこんなとしてるんだから。だからどうか兄さん、ジョンデ、それから――年下のガキ共。まだ帰つて来ないでね。

からだのうちがわに指をいれられて、その違和感にベッキョニはつきりと「キもちわるい」と言つた。勿論、白くてつるりとした円い尻をこちらに向けて、すべて預けきつて投げ出したかっこうのまま。

「…へん？　俺ちゃんと勉強したんだけど…」

「ふ。う。あ。ゆびつていうの、わかる。」

はじめはもぞもぞと、身をゆすつていたベッキョニは、ある程度になると「びりびりする」と言つた。そうして、「くるしむ。」と。

あ。どうしよう。痛くないように、きちんと小指から太い順に入れていりぐちを解して扱ただけで、こゝまで来てそ

う言われたら。

今日、まさかこんなふうになるだなんて、俺は想像もしていなかったのだけど、それでも「あわよくば」とは思ってたよ。いれたい。ここまでしたら、…したい、よ。

ベッキョニにおられたり、機嫌を損ねるようなことはしたくなくて、俺はどうしようかとどう思う惑う。それで、おそろおそろ彼の尻たぶにぐちを、くつつけた。ちゅー。

吸いつく感触に、肩を跳ねさせてベッキョニはまたちいさくあえぐ。あうん。それが可愛くって、何度もしつこくそこにキスをした。うう、俺、へんなやつ。だけど、どうしようもなく触れたいし、唇でいとおしいというきもちを伝えたくってしかたがない。ベッキョナ。すき。したい。いれない。

「…だめ？ もう、しない？ ベッキョナ…」

あー。目玉がこぼれ落ちそう。自分で訊いたその言葉がかなしくってどきどきしすぎて。心臓が耳のうちがわで弾んでる。耳たぶがあつついや。ずず、と鼻をすすって、それから、彼の名前を呼んだ。

「ベッキョナ」

俺の声に反応をして、ベッキョニは臍にく、と力を入れた。尾髄骨びついこつに向かって緊張がはしる。ペーリとへこみ筋。あー。かわいい。かわいい。

突っ込んだ指ごとベッキョニのいりぐちをべろり、と舐めあげる。きもち、いいですよ。だって、まは根を引き絞るようにならばに窮屈きうくつにして勃てる。そこで先っぽからはだらだら、こぼれてきてるよ。やらしく濡れてる。つるつるとしたいきもちをそのぶぶん・を、しばし擦っていた。両肘を突いて、その合間にちいさなあたまを垂れさせて、額をシートに擦りつけて

—それで、ベッキョニはどつとつに、泣き出した。

「ふ、あッ。あ。やだ。トイレ、行きたいみたいな、かんじ」

「え、え。あの、ベッキよな。あの。」

「やだ。セーエキじゃないの、でる。」

「あ、あのそれ、べく…」

「もうそんなのしないで。ゆび、それ、されたら、でる。もらす」

幾ら酔っていて、判然としない状態でも、それでもそれには羞恥を感じるようだった。ぐずぐずと赤んぼがぐするみたいにして頭を振って、シートに臉をおしつける。それからしばらく、ビヨン・ベッキョンは黙っていたの、だが。

「…い、いれて・みて」

「ん？」

俺は、おしいなあ、と思いつながら埋まり込んだ指を眺めていた。せつかく入れたのに。はいったのに。もしかしたらこんな機会、二度とないかも知れないのに。

耳の奥ではあいかわらず動悸がしていて、よくよく聞くとはしなかった。性器を伝ってこぼれてくる精が彼のやわい肉を纏った内腿を濡らす。そして、その麓の袋も。

ベッキョニは後ろ手で、俺の指を探る。裂傷を伝い降りて来た彼のきれいな白い指は、俺のそれ・を見つけると、かすかな力で握り込んで来た。あ。もう、終わりか。これで。いれるまえに。…いいのだけど、出来たから。ここまで出来たから、いいけど。だけどもあんまりにもかわいそうだよ。…何がって、俺の三年越しの恋心が、だ。こんな時にでも自分のことばかりで本当に、



コール・ミー・ベイビー

初版発行—2017年9月24日

発行—ナリタマコト(千の雨)

Pixiv

印刷—製本直送 様

個人サイト

本書のお話はすべてフィクションです。

実在する団体・人物・企業とは一切関係ありません。

関係者各位への送付、ネットオークションでの出品は

絶対におやめ下さい。